◉自然保護思想の多様性

小関隆祺

国際自然保護連合（IUCN）の正式の名称は自然と自然資源の保護のための連合である。現在、自然保護という概念は主として環境との関連で用いられることが多いが、国際的に、あるいは歴史的にみると資源保護が重要な部分をしめている。米国のような資源に恵まれている国でも自然保護の中心的命題のひとつは資源保護であった。古くから資源の賢明な利用（ワイズユース）という言葉が大統領の年頭教書などでしばしば使われている。豊富ではあるが有限な自然資源を人間生活のために計画的に賢く利用しようというのである。

自然の対立概念は文化である。文化の本来の語義は土地を耕すこと（カルチュア）であって、自然に対する人間の働きかけを意味する。人間はもともと生物の種のひとつ〝ヒト〟として自然の一部であり、自然に全面的に依拠して生存してきた。個体数が増え集団生活をし社会を形成する中で、次第に生産力を高め自然に対して主体的にたち向うようになった。自然は居住と生産のための空間であり、生活資材を獲得するための唯一の源泉として資源となったのである。文化とは自然に対する加工を意味する。

しかし、どんなに文化が進んでも、人間は自然の大きな節理の中の存在である。したがって文化が進めば進むほど、自然との間にはじめから内包していた矛盾対立ははげしく複雑にならざるを得ない。自然保護の思想は、文化概念のひとつとして生れ、歴史の進展とともにその内容を豊富にし多様なものになった。珍貴なものの保護、資源保全、風景維持、自然回帰、自然回復、文化財保護との共同など、相互に矛盾を含む多様性である。原始人には自然への畏れはあったが、自然保護という思想はなかったにちがいない。保護思想の多様性は内容の豊かさを示す。

（協会副会長）